

PHD LETTER

44

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1992・9

- ネパールフォローアップレポート.....3P
- 研修生レポート.....4・5P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会

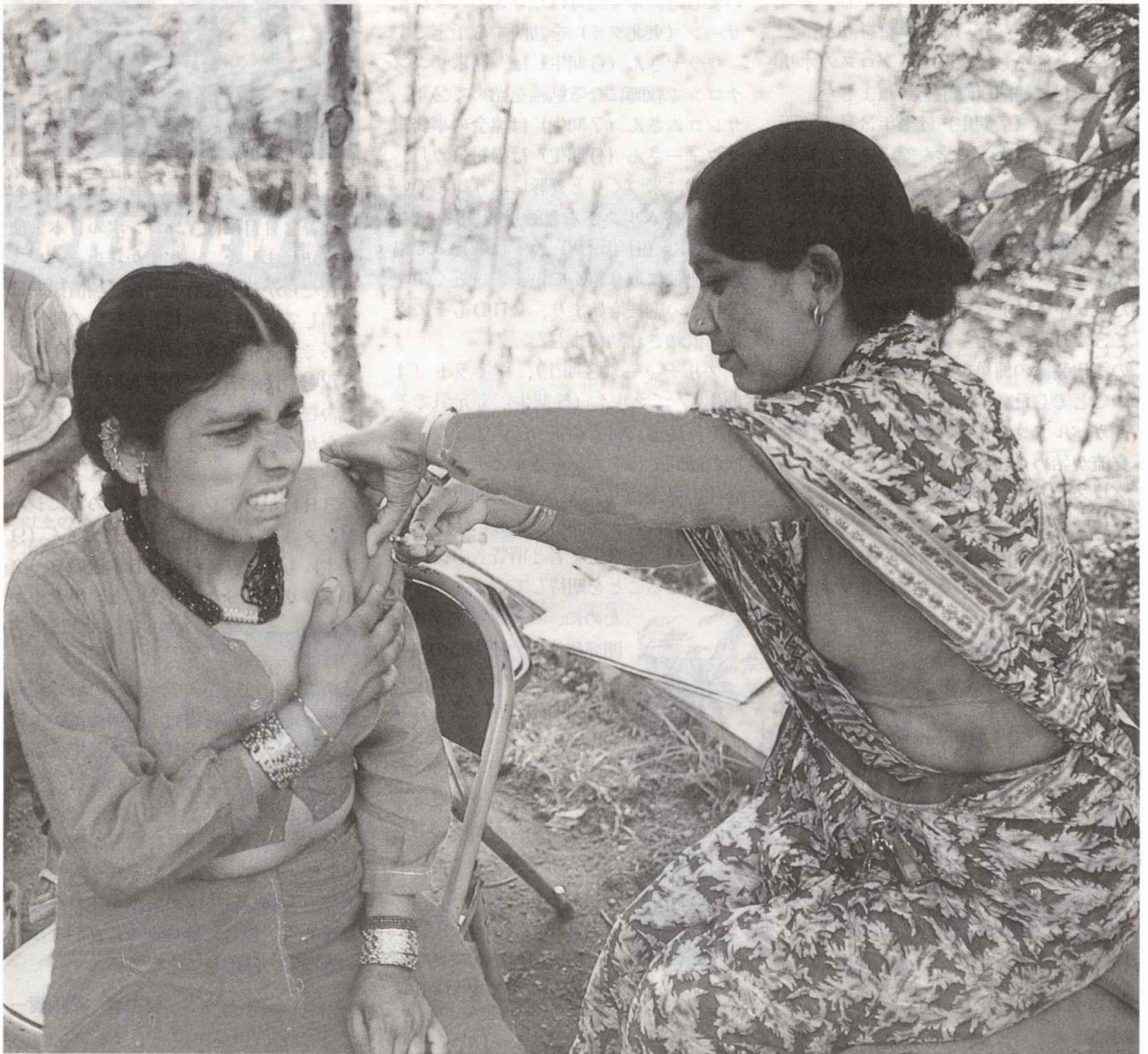
編集人:草地 賢一

住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202

TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867

郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会

定 価:100円



(ネパール、マハデブスタン村)

今日は3カ月に一回の避妊注射の日。
村の小さな診療所の前の日陰に
朝早くから村の女性が集まってくる。
村にはお医者はいないので、保健婦
さんが巡回してくる。

できることなら薬に頼らない方法が
いいのだけれど、とりあえず今はこれ。

それでは腕をまくって
ハイ、いきますよ。

草の根の人々を訪ねて

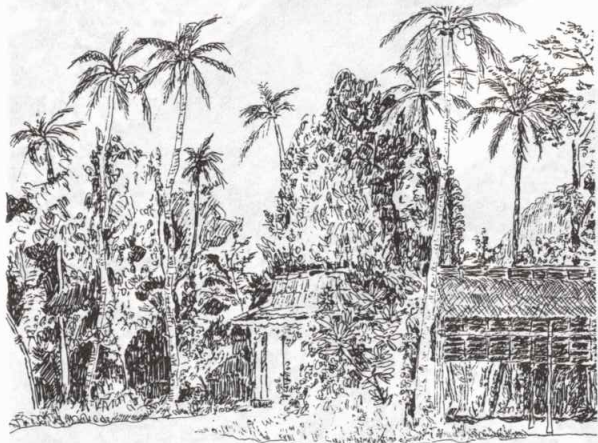
各地で芽をだす研修生の働き

7月6日第3回保育者のための第三世界スタディツアーを引率して伊丹空港を発って既に3週間が過ぎました。今フィリピンとタイを回ってコロンボに行く途中、バンコク空港でこれを書いています。

フィリピンでは3年前から地域組織化の研修を引き受けてもらっている、ヌエバエシーハ州、ガバルドン村を訪ね、この春の評価をし、次いでネグロスのオリンガオ村に帰国研修生を訪ねました。

ドミー君(7期生)は来年3月まで西ネグロス農業大学で学んでいます。結婚は卒業後でしょう。ネストール君(8期生)は女の子の父親になっていました。彼は今モデル農場を作り、将来有機農業研修センターを作りたい、と意欲的でした。ジャネットさん(9期生)は帰国して3カ月。少し落ち着いてきて、飲料水の浄化装置の簡単なものを作っているとのことでした。

ガバルドン村とオリンガオ村の農民の交流が始められることになりました。ネグロスの人々が有機農業を、ガバルドンは地域保健を教えあうとのこと。PHDはこの交通の旅費などを負担し、草の根の連帯を応援することになりました。



画・山端久男

これは北タイのカレンの人々と東北タイのサイナワン農民協会の間に、3年前から始まった国内交流と同じねらいです。

サイナワンの人々は、昨年12月カレンの村を訪ね、自然の豊かさと伝統を大切にすることを学び教えられた、と言っていました。今年12月はカレンの人々がイサーン(東北タイ)を訪問する予定です。

ワラヤさん(6期生)は、週末サコンナコンで教師になる勉強を始めて2年、サンコムさん(7期生)は協会の事務、サウェーさん(9期生)は帰国3カ月、意欲的に米づくりと養豚に取り組んでいます。バムルンさん(89年短期)、トンスクさん(91年短期)いずれも元気で協会の運動に取り組んでいます。近くのマイ村への応援も始まり、PHDもその支援を依頼され訪ねました。

プリチャー(3期生)、ウィラト(4期生)、コマさん(5期生)も元気でそれぞれ地道に村で頑張っていました。今回の訪問ではタニットさんとチェンマイ在住の農業指導者浅井さんが同行して下さり、特にムシキー村を中心にチェンマイと結び、将来生産者と消費者の提携運動が起こることを期待しています。このために、バヤップ大学農村開発研究所の研究員のタニットさんを、来年5月から3カ月日本に招くことが決定しました。

7月30日第4回スリランカフォローアップ&スタディツアーの一行9名をコロンボ空港で迎えました。兵庫県加古川の丸山陽子さんを中心にアジャントさん(6期生)のヨーグルトの製法視察、電気の専門家山端

久男さんは電気がないところでヨーグルトの冷却をどのような方法で考えるかが目的です。



丸山さん、相川さんたちとともにヨーグルトをつくるアジャントさん(中央)

到着2日目には、コロンボの日本大使館を訪ねました。一昨年からチャールス村長たちが日本政府の小規模無償援助に申請している村の水利計画案件の陳情のためです。担当書記官は小学校4年生から72才の高齢者まで日本人10名、研修生を含むスリランカ人3名のグループに驚きながら熱心に私達の話に耳を傾けて下さいました。

3日目からアジャントさんの家にジャヤンタさん(4期生)、ナンダナさん(9期生)も集まり、村流と日本流でヨーグルト作りに取りかかりました。出来上がりは国による味覚の違いで、評価は優劣つけ難し。

山端さんは近くのアラウワの町で冷蔵庫の修理屋さんを視察。冷却装置のエアコンプレッサーの手動化に挑戦することになりました。これができれば村のノーベル賞ものです。

3人の研修生を中心に「アジアのそよ風農場」のヨーグルト、それを村の中心で売る共同ショップの計画が進むかもしれません。12月には日本からヨーグルトの専門家の派遣を予定しています。

総主事 草地賢一

ネパール フォローアップレポート

82年から8人の研修生を迎えたネパール。この3月に教え子ラダ・バンストラーさん(2期生)を訪ねた下関の藤田公美さんのネパールへの思いと、1期生バラト・ビスタさんの近況をお届けします。

ネパールからのプレゼント

「ナマステ!!公美さん、やっとネパールに来てくれましたね」こんな会話で始まった、ラダさんと7年ぶりの再会でした。

思い起こせば7年前の旅は、私には忘れられないものでした。旅行社の手違いから荷物が紛失してしまったのです。かばんの中には、野菜の種、手芸材料など、ネパールに持って行こうと一生懸命集めたものばかりでした。着る物、食べる物、全てラダさんのお世話になりました。ラダさんの家の土間の上に蓆をしいて、村の人達がネパール語や編物を習いに来るのですが、その席で私の荷物が無くなったことをラダさんが告げると、「オーッ」というため息と共に、一人の婦人が立ち上がり「私達は貧しいので貴女に差し上げる物はなにもありません。でも私達の心を受け取って下さい」胸の底から突き上げてくる熱いもので目の前のその人の顔が涙の中で揺れました。

その時婦人の側に居た小さな女の子カルパナが、2才の男の子の母親になっていたのです。月日は紛れもなく過ぎていました。人込みの中にかつての小さな女の子が赤ん坊を抱えているのを見つけた時の私の驚きといったらありませんでした。おずおずと近づき「カルパナ…貴女、カルパナ?私のこと覚えている」彼女はニコリと静かにうなずきました。

物質文明の中にとっぷり浸って生活している私が失っているもの、それを再発見させてくれる旅でもありました。私はネパールの人達からたくさんの贈り物を頂きました。この両腕でも抱えきれない程のもの、それは心です。今年もラダさんの生徒さんが編んだ温かいセーターが、我々のグループの活動報告(古切手運動が中心)を兼ねた秋のネパール展のために届きました。心からのダンネバード!!(ありがとう) 藤田公美

村人の、村人による 村人のための……

ビスタさんが、第1期研修生として来日したのが82年7月、もう10年も経ったのだと再会に感慨ひとしお。彼はネパール家族計画協会の推薦で来日、日本では養鶏、農業の研修を行い帰国、首都カトマンズの北東のシンドゥパルチョーク地区で保健衛生、農業、植林、土木など広範囲の生活改善の活動にあたってきました。昨年冬、久しぶりに手紙が届き、村で新しい組織を作り、村人の生活改善に取り組むことになったと知らせてきました。



村人にPHDの説明をするビスタさん(左端)

昨年末にできたグループの名はネパール語でサムス・セワ・サムハ(SSS)といい、社会福祉の会の意味を表します。カトマンズからバスでバネパ、ドゥリケルを経て約5時間のマハデブスタン村を中心とする9つの村が活動地域です。ここには8千~1万人が住んでいます。主にドヌワル、ブラーモン、ネワール、タマン、サルキ、マガル、ドマイ、カミ等のカーストに属します。

村の産業はほぼ農業、4月から12月にかけてが農繁期で米、とうもろこし、じゃが芋を中心に、乾期にはメイズ、麦も作ります。家畜は水牛、牛、山羊、鶏を飼い、一部に豚を飼うところもあります。

地域の中央部にはバス道が1本通っていますが、そこ以外は歩く道だけ。電気もこれから。煮炊きは薪を使います。水は山の湧き水をパイプで引いた水場がありますが、乾期には枯渇し、谷を下りて川まで水汲みにいかなければなりません。小学校は6つ、中学校が1つありますがすべての子供が通える状況には至っていません。病院はバスで1時間の町にしかなく、小さい診療所ひとつが頼りです。

このような状況の中で、生活には日本と違う電話やファックスのないゆったりした時間の流れや、家族や村人同士の十分な交わりなどうらやましいところもたくさんありますが、生活に最低必要な条件のいくつかが足りず、その改善が大きな課題です。中でも健康な暮らしを支えるための十分な食事の量と質、そのための食糧増産、家畜の飼育、病気を防ぐ環境衛生、飲み水、農業用水の確保、燃料の確保、現金収入策、識字、子供の教育またそれらの必要を理解してもらうための村人への教育など課題は沢山あります。

このような状況に取り組むにあたって、SSSは外からの援助や協力の前に、まず村人自らによる活動に重きをおいています。会の構成員は全て村人、各村毎の集まり、各村の代表の集まりを通じて、会の方針を定め、村人が実際に身体を動かします。活動資金も村人がそれぞれの収入に応じて、出し合うことが基本です。大口のスポンサーや上部団体をもたず、資金的余裕はないため、会の事務所もまだ建設途中で屋根はこれから。給料をもらっている人は診療所の2人の保健婦さんだけ。ここしばらくの実施可能な計画として、全域対象の診療所を基地とした保健プログラムと9つの村を2年単位でひとつずつ強化地域として、総合的な取組をすすめていく予定と聞き、堅実さを感じました。92、93年は41世帯のドヌワルカーストの村、ジュディガオンが指定され、そこでの重点は水の確保、家畜のエサ、保健環境整備におかれています。

このグループのまとめ役は、誰だろう我がらビスタさん。これまでの経験と実績を買われ就任し、無給かつ多忙。さらに5月に地方選挙があり、ここでもビスタさんは推され、村長に当選。これも無給。村の人々に信頼されるのもいいけど楽じゃない。今回の滞在中も、彼のいるところ、ひっきりなしに村人が訪ねてきていました。

彼のこの活躍ぶりにPHDの研修がいくらかでも役に立っていると思うと大変嬉しく、彼の研修を支えていただいた皆さんに真先にご報告をしたいと思いました。SSSの活動の成果があがるのはこれからになりますが、PHDの研修のねらうところは、このような形で時間をかけてすすめていくのです。長いおつきあいをお願いします。

私もちよつと 世界を斬る!

くもりのない眼で

今出 敏彦(勤労学生・神戸市)

コロンブスがアメリカ大陸を発見して、今年で五百年とか。この出来事は偉大な発見として学校で習った記憶がある。しかし、史実はそれだけではなかった。最近になって、先住者であるアメリカインディアンにとって何であったのかが、知

らされるようになった。この五百年は新参者による開拓の歴史と同時に、先住者にとっては迫害の歴史でもあったのだ。

視座の違いによって、ひとつの出来事が全く違う別の側面を持ちうるのは、史実が、それを記した人の視野の範囲内でのみ正当性をもつことを示唆している。

東西冷戦が幕を降ろし、かつてないまでに国際化が叫ばれる中、コロンブスが

発見という表現は西欧主軸の世界観への反省を私たちに迫っているといえよう。

今、その必要性を最も強く迫って来るのが、PKOも含めた日本の国際貢献の国際という概念の問い直しではないだろうか。激しく動く世界に対して、柔軟な価値判断力が備わった、そんな人達がなし得る事が、真の国際貢献であると確信する。

10期生 研・修・生・レ・ポ・ー・ト

研修生でもあり、先生でもあり ティン・アン・ウィンさん (ビルマ)

大森昌也宅(兵庫・和田山町)→吉田吉彦宅(兵庫・氷上町)→安達一博宅(兵庫・豊岡市)→渡辺省悟宅(兵庫・丹南町)→岐阜・高山市

ビルマの村では、生活改善のリーダー的存在のウィンさん。来年度以降の研修生のためにも多くを学んでいきたいと頑張っています。研修テーマは農業のみならず、適性技術など多岐にわたるため、各研修先では積極的に質問し、学んでいく姿勢が見られます。

これまでの研修では、稲作、野菜の手入れ等の作業から日本の農作業をいろいろ体験する中で、ビルマと日本の農業の違いを学んできました。とくに興味を持ったものは、トマト栽培だったようです。ウィンさんの村では、



キュウリの育ち具合を調べる安達さんとウィンさん。

換金作物としてトマトは主要な作物であるため吉田さん、安達さんのお宅で経験した管理作業は、その工夫、技術等参考になったとのことでした。夏は41℃まで暑くなるウィンさんの村で、どのような工夫、配慮が必要とされるのかを学ぶことが目下の課題です。また、農業の学びを深めていく中で産消提揚運動にも関心を持ち、その取り組みの現場を見学し、消費者の方々のお話を聞く機会を持つことができました。ウィンさんは何かと規制の多いビルマでも、この運動なら可能性があるかと、更に学んでいく意欲がうかがえます。

今後の研修ではトマトの加工、炭焼き等、

日本の生活、言葉にも慣れ本格的研修に入った第10期研修生4名。

研修先の方々から、日本語の上達が早いとほめられ評判は上々です。4名とも来日前に日本語を予習していたという勤勉な研修生なので、今後の研修成果、日本語の上達も期待されます。

韓国比較研修(9月9日~9月24日)を終えると長期研修のスタート。じっくりと腰を据え、学びを深めていきます。

村で応用し得る技術についても学びたいとのこと。

〈研修先から〉

大森昌也さん「日本に来て2カ月だけでこの日本語の上手さはなぜ？、田植えについては特訓の必要あり。」

吉田吉彦さん「感想を述べるまでもない。西郷さん、二宮さんのような立派な方でびっくり。日本人が忘れていた心を持つ人。ウィンさんから教えられたことの方がはるかに多い。」

安達一博さん「トマト栽培を村人に教えるために懸命にがんばる姿には感動させられました。」

渡辺省悟さん「ほとんど不自由なく話す日本語には驚いた。ゆつくりと村を変えていこうという姿勢には共感を覚えました。」

子供たちの人気者!

シャーンタさん

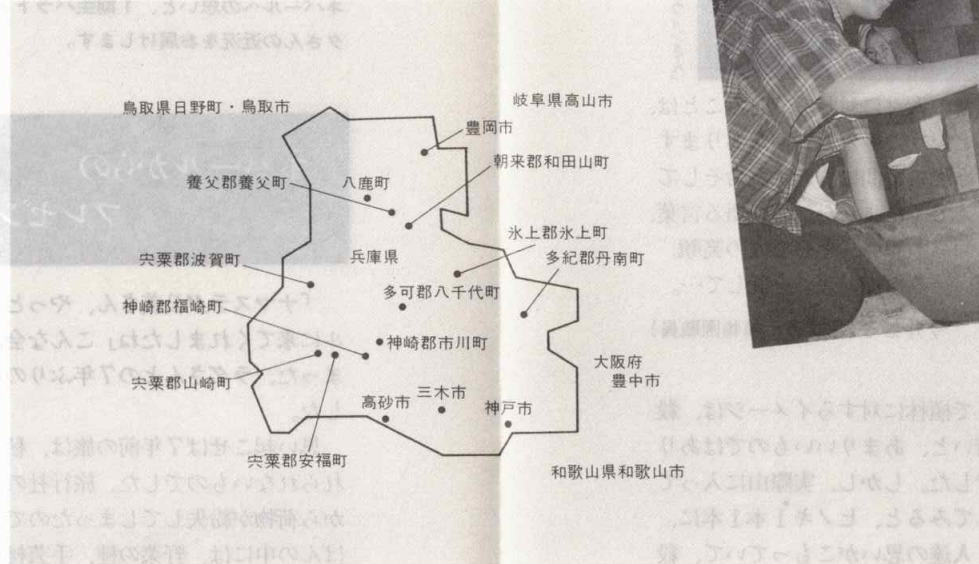
(スリランカ)

牛尾武博宅(兵庫・市川町)→渋谷富喜男宅(兵庫・神戸市)→広岡史郎宅(兵庫・福崎町)→青位真一郎宅(兵庫・八千代町)→和歌山県海友会

農業が大好きなシャーンタさんは、当初心配された日本語も目を追うごとに上手になり研修にも熱心に取り組んでいます。

これまでの研修の中心は養鶏・野菜。養鶏については牛尾さん、広岡さん、青位さんと3軒のお宅で学んできました。

湿気、風通しを考え、工夫した鶏舎の設計、鶏の状態に応じて部屋を分けること、飼料のつくり方等かなり詳しい内容で研修を進めています。またいくつかの産消提揚運動の現場



を見学することができ、生産者と消費者の間にブローカーが仲介しない流通形態に興味を持ち、村での実践も考えたいとのこと。



鶏のエサをつくるシャーンタさん、良く似合っていますね。

野菜の栽培管理と共に渋谷さんのお宅で学んだことは、農業の功罪についての知識と、減農薬の方法。シャーンタさんの村では農薬が高価なこと、村人に農薬の正確な知識が欠けることなどから見ても、渋谷さんのご指導は参考になったようです。

環境が全く異なる日本の農業にシャーンタさんも初めはとまどったようですが、これから自分の村といろいろ比較しながら学びを深めていきます。とくに養鶏の研修の成果は期待できるところです。

〈研修先から〉

牛尾武博さん「日本語が少々不安と言われたがとんでもない。自分の言葉で積極的に意思を伝えよ



草の根生活塾に研修生も全員参加、アジア料理に腕ふるった。小さな子には少し辛かったみたい。

まった栄養対策が難しいとのこと。そのため母親に子供の栄養管理の大切さをどのように



調理実習で腕前を發揮。作るのはいけど食べ過ぎないでねヤニさん。

うとする様に感動。近所の小学生からも好かれる研修生でした。」

渋谷富喜男さん「短い期間だったけれど、よく働く研修生でした。農薬の説明は難しかったけれども、何とか分かってもらえたと思う。」

広岡史郎さん「鶏のエサのつくり方についての研修が充実していました。近所の夏祭りで歌ったシャーンタさんのカラオケ。結構好きなおようでした。」

青位真一郎さん「とにかく元気な研修生。キャンプにも参加して子供たちの人気者。これからがんばって下さい。」

子供の栄養が一番の関心事

ハスマヤニ(ヤニ)さん

(インドネシア)

波賀幼稚園・みどり保育園/田中五郎宅(兵庫・波賀町)→山崎保健所・安富町保健センター/村上嘉宏宅・月輪定弘宅(兵庫・山崎町・安富町)→根雨保健所/笹間政典宅(鳥取・日野町)→百村清宅(鳥取・鳥取市)

ヤニさんは、保健衛生の中で栄養に関する知識を主なテーマとして挙げていますが、これまでの研修の中では他にも多くのことを吸収してきたようです。

幼稚園・保育園では保母さんと共に子供たちと接しながら、栄養のバランスを考えた給食、衛生上の問題を考えました。ヤニさんの村では、家族はもちろんのこと隣近所でもお互いに子供の世話をしているため、ま

して伝えていくのが今後の課題です。保健所、保健センターでの研修では、それを実施する公的機関の役割・仕組みについて参考になる場所があったようです。地域の住民に栄養教室・個別訪問等を通じて、意識を高めていく方法はヤニさんの所属するPKK(家庭・衛生向上の会)での取り組みが期待されます。

医療設備・施設の整った日本の現状から学んでいくことは難しいこともありますが、いろいろな問題を自分の村と比較しながらこれからの研修で学びを深めていきます。

〈研修先から〉

波賀幼稚園「園児からヤニ先生と呼ばれ、少々照れていたようです。研修では栄養関係の難しい言葉がたくさんありましたが、辞書を引ながらがんばって勉強していました。」

月輪ヒナ子さん「いっしょにいろいろな研修先を回り、たくさんの人と出会ってきましたがヤニさんの礼儀の正しさには脱帽、先生方からの評判もとても良いものでした。」

出産にも立会えました

セニフィタ(エニ)さん

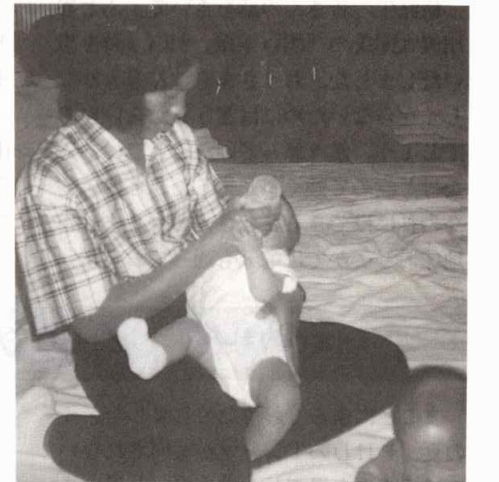
(インドネシア)

高砂市保健センター、高砂保健所/船田昭信宅(兵庫・高砂市)→井上弘宅(兵庫・養父町)→三木保健所/長井宏之宅・繁田正文宅・芝美代子宅(兵庫・三木市)→豊中保健所・国際交流の会とよなか・ガールスカウト第61団/葛西美紗宅(大阪・豊中市)

エニさんは保健所、保健センターでの研修を中心に裁縫、刺繍等の手工芸や女性グループの活動も学んできました。同じ村のヤニさんと重なるところもあるので、研修の合い間にはお互いに情報を交換しながら学びを深めています。

これまでの主なテーマは妊娠中、出産時の妊婦のケア。エニさんの村では病院が遠いので、医師の診察を受けることがあまりできません。そのため研修を進める中で、地域での取り組み、特に農村部での対応に関心を示しています。

エニさんの最も印象に残ったことは、養父町滞在中助産院で出産に立会えたこと。病院



慣れた手つきで赤ちゃんの世話。エニさんの子供好きがわかります。

のように医療設備を置いていない状況で助産婦さんの出産時の仕事は大変参考になったようです。エニさんの村では保健衛生の知識が村人に十分知られていないため、この体験をどう伝えていくか絵や写真を使って伝えることを考えています。

〈研修先から〉

高砂市保健センター/三木正子さん「専門用語の多い分野だったけれど、それを苦にせず努力していました。職員みんなと仲良く過ごせて楽しいひとときでした。」

井上弘さん「短い間にいろいろなところで勉強したけれど、皆さんにすぐ打ちつけていました。若くて明るいお嬢さん。ゆつくりとがんばって下さい。」

日本の農林業体験から アジアに近づく

夏の行事、農業体験合宿「草の根生活塾」(7/22~7/26兵庫県篠山町)と林業体験合宿「枝打族」(8/5~8/9兵庫県丹南町)が県外からも多くの参加者を得て、今年も行われました。実施に協力をいただいた、篠山町中央公民館、篠山町青年団、老人会の皆さん、滞在農家の東門さん、渡辺さん、中野さん、安井さん、瀬戸さん、溝口さん(以上草生塾)、大山振興会、篠山林業事務所、丹南町役場の皆さん、農場グリーンバレットの皆さん(以上枝打族)、ありがとうございました。



草生塾の2,3日目は農家に分散して農業体験。丹南町安井さん宅ではトマトの収穫。

黒い王様

おなかをすかせたこどもは／おなか
がすいているのでかなしかった／お
なかがいっぱいのおうさまは／おな
かがいっぱいなのでかなしかった／
こどもはかぜのおとをきいた／おう
さまはおながをきいた／ふたりと
もめになみだをうかべて／おなじひ
とつのはしのうで

研修生の皆さんの話をきいて、ふと谷川俊太郎氏の「黒い王様」という詩を思い出しました。おうさまもこどももかなしくならぬためにはどうしたらいいのでしょうか。常々思っていたことではあったけど改めて強く感じました。とはいえ今の私にはできることさえわかりません。地球のどこかでは電気も通っておらず、

日本では必要じゃないことにまで電気が使われている。飢えた人々がいると思うと、ファストフード店のまに食べもの詰まったゴミ袋がたくさん積まれている。どうしたらこの偏りがなくなるのか、考えることはできても直接何もできません。だから、せめて忘れないでおこうと思います。そうすることにより、生活の必要最低限のことすら自分でしなくなり、食べもののありがたさすら忘れた人間になってしまうことを防げる気がするから。

草生塾リーダー 田辺祐美子
(京都市 短大生)

「託すことは、信じること」最終日の反省会で耳にした言葉です。(自ら育てた木々を自ら手で切倒すことの難しい林業の仕事と、スタッフとして参加した4泊5日の共同生活からの気づきのこと)とても印象的で、私の中で今もこだましています。

今年で2度目という「枝打族」丹波大山のメニューは実にもりだくさんで、5日間にわたって、緩効性のエネルギーをたっぷりと補充したと思います。その帰り道、一緒になったウィンさん



ハンゴを用いての枝打た思わず表情をかばるウィンさん

は、「ビルマの人々に対してできることは、『知る』ということの他に何がありますか」という私の質問に、一生懸命そして親切に答えてくれました。彼の語る言葉、祖国ビルマへの想い、そして彼の笑顔。彼の願い、みんなの想いを託して…

今井妙子(尼崎市 植物園職員)

「今まで植林に対するイメージは、殺風景で暗いと、あまりいいものではありませんでした。しかし、実際山に入って作業してみると、ヒノキ1本1本に、山で働く人達の思いがこもっていて、殺風景な植林ほど手入れされていると実感しました。また、自然林をみるように植林をみると、どこか食い違ってくるのではないかと、植林は、林業という仕事のもとの、人とつながっているのではないかと感じました。

作業の合間に見上げた青空。時折吹く心地良い風。汗だくになりながらも、なぜかすがすがしい気分になれた作業でした。

竹本有里(藤枝市)

ちょっと遅くなりましたが 今度のTシャツはアジアの漫画家シリーズ!

まことに永らくお待たせしました。この夏、PHDのTシャツが案内されないで裸で夏を過ごした方も多と思います。そんなことないか。サテオキ、お待たせの分を埋めて余りある超オリジナル、アジアフレーバーたっぷり、文化の香り溢れる、PHDならではのものができました。

職員、ボランティアが恐れを知らず、アジア各国の一流マンガ家に直接交渉。「アジアの文化紹介をし、アジアを身近に感じてもらうためにあなたのイラストをぜひPHDのTシャツに」と要請、それぞれ快諾を得て、第1弾としてタイのピチットさん、チャイさん、ネパールのミランさんによるTシャツの用意が整いました。

スヌーピー、ディズニーなどのアメリカンキャラクターに負けじと、PHDはアジアを強力に押しします。冬のトレーナーへの展開、第4、第5と続く作者も交渉中。

白地のTシャツにカラーでプリント。サイズはM、L、LL。値段は2千円。PHDまでご注文を。



タイの農家の働く様子を描いたピチットさんでシリーズはスタート。



カトマンズの若手漫画家、ミランさんのメインキャラクターはMr.バタレ。



タイで発行部数No.1、タイ・ラット紙に寄稿するチャイさんはタイで知らぬ人はいない。



1ヵ月も前から楽しみにしていた、フローリナナII(東京都世田谷区)での集まり。1991年10月24日満員の室内の中央に置かれた一台の織り機。日本にも古代からの様式そのままと伝わっている「いざり織り」の織り機とPHD協会の招いたカレンの女性ベリポーさんに皆の目が注がれていた。布が好き、織りの勉強中、いろいろな状況の方が期待に胸をふくらませ、ワクワク、ドキドキしながらの当日の集まりであった。

タイの農村で実際に織られているのと同じ状態で為されている手元を、その仲間の一人として私もじっと見つめていた。何と単純で素朴な仕草なのだろう。それなのにあれ程、人の心をうつ作品ができ上げてくるふしぎさに心踊らせ、生産される地に思いを馳せながら、彼の地で織られた布を手にして、国境を超え、地域を超えて、これ程までに人の心をうつのは何故なのだろうと、人と人とのつながりの深さも又、布を通して思ってもいた。そんな出会いから、PHD協会を通して、

タイの布とのめぐり合わせになっていったことが昨日のこの様にも思われる。友人から、知人へと又見知らぬ人との心暖まる出会いも布を通して生まれている。織を業としてしている人の集まりの中にも両手にさげた袋の中に持てるだけの布を入れ、「今回入ったのはこんな種類です」とまるで商人の様ねと笑いながら、一人でも多くの方にこんな素晴らしいものがあることを知っていただきたいと今日も出かける私である。

原沢博子(埼玉県大宮市)

PHD NEWS

【会費・ご寄附寄託状況】

1992年5月	146件	3,974,894円
6月	92件	1,763,158円
7月	112件	12,328,321円
350件		18,066,373円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴しました。ご協力いただいて深く感謝申し上げます。

日程 92年12月23日~93年1月2日
10泊11日

コース 大阪-チェンマイ-北タイ-カレンの村-東北タイ-バンコク-大阪
費用 約18万円 定員 13名

帰国研修生コマ、ウィラト、プリチャー、ワラヤ、サンコム、サウェーさんに出会い、村の生活を体験します。

【第6期関西NGO大学】

~第三世界理解講座~	(講師)
第1回 9/12~13	中村尚司
第2回 10/3~4	池住義憲
第3回 10/31~11/1	山下明子・栗野真造
第4回 11/28~29	菊地創他
第5回 93.1/15	石 弘之
第6回 2/13~14	ジャーナリスト 他

各回1日目19:00~2日目16:00
但し第5回公開講座は9:30~16:30
全期間受講料:15,000円 食・泊実費
定員:40名
主催:関西国際協力協議会

パンフレット、申込み書を用意しています。お問合わせ下さい。

【新職員を紹介します】

前号〇月×日でお知らせの通り平野さんの退職に伴い、田尻啓子さんに2ヵ月リリーフをお願いしてきましたが、7月13日より囁託として2人の新人が着任しました。茨城から参上の渡邊靖、28才と主に関西育ちの柳下恵子、24才の両名。いずれも独身。渡邊は大学の指導教授の紹介で、柳下はPHD職員とマニラ空港で偶然出会った彼女の友人から職員募集をきき、登場。よろしくお祈りします。

〇月×日のPHD協会

総主事 草地 出張先のフィリピン、ネグロスで車が川を渡る際にエンジン停止。ここぞとバンツー丁で川にとびこみ、温泉気分。そばで一頭の牛牛も水浴中。遠目に区別がつかないとは村人の話し。

主任主事 藤野 草の根生活塾の最終夜、遅れてキャンプファイヤー会場に到着、皆が火を囲んでいるすぐ手前、迫るも闇に潜んでいた穴に人知れずハマる。眼前の盛り上がりとの落差が大きく、落ち込む。

主事補 小松 暑い盛りを迎え、一段と激しく汗をかきかき仕事にとりくむ。腰にタオルは必需品、減多に冷房入れない事務所では頭にタオルで温泉気分。フィリピンの総主事にならう。

主事補 吉岡 研修生に同行し、和田山町の大森さんのお宅で田植えを体験。プロのシャーンタさんから「たいへん良くないです」と叱られる。獣医のウィンさんも実はヘタで二人で慰めあったとか。

囁託 渡邊 着任すぐの草の根生活塾に参加し、集まった子供から国際人を超えて宇宙人1号と命名され、玩具となり、何でもアリの仕事内容にうろたえる。しかしこれも開発教育の一現場なのである。

囁託 柳下 小松と同じ大学の出身、某商社勤務2年3ヵ月を経てPHDへ。事務所に届いた書損じハガキの小包に同封された饅頭を発見。ボランティアの口から「食べよう」と言わせる知恵者。

6~7月、片道2時間かけて河内長野から田尻さんが助っ人。ご苦労様。毎週水曜方にはは播磨町の江草さんが事務の助っ人。感謝。

【年末タイツアーを村人と一緒に!】

年末恒例のタイスタディツアー。今回は、昨年末の約束通り、カレンの人々を東北の村へ連れていき、農民交流第2弾を行う予定です。



letterから事務局の暖かい雰囲気が増えます。そこから草の根の運動の力強さを感じます。
(藤沢市・青柳芳子)

帰るまでに一度、いただいたトレーナーを着てエッフェル塔に登ります。フランス人の会員が増えるかもしれません。
(西宮市・弓削美紀子)
滞在中のフランスから

緑は雨に濡れ瑞々しく陽に輝いておりませんが、青空の彼方がむしばまれつつありますこと、憂慮しております。自然と共に生きている発展途上国の人々に、より試練の波は押し寄せ、我々はより快適で飽食の日々、何かしら矛盾を感じております。
(寝屋川市・森山久美子)



編集後記

「ゆーこさん編集後記書いてみない」と突然言われ「えっえっえっ」と行っている間に書くはめとなってしまいました。しかし書くからには…とはりきって書こうとしたまではないが…何を書いているのかと考え込んでしまう…うーん。

実は、私はPHDとの関わりはとっても浅いんです。まだPHDの存在を知ってから4カ月程しか経ってません。でもPHDの事務所はとても居心地が良くていりびたり…ボランティアの仲間も心あたかい人達ばかり、いつでも歓迎してくれます。学校の先生、幼稚園の先生、会社員、学生、色々な人達がいて情報交換もさかんです。色々な年齢層の人々が色々な仕事を持ち、色々な立場で関わっていらっしやる。もちろん事務所に来てらっしやる方々だけでなく、忙しい中、色々な形で

本当に多くの方々が関わってらっしやるんだと、このPHDのレターを見るたびに感心しています。このPHDレターは忙しい方々が事務所に出入りできなくて、研修生とも交流しにくい、そういった中で少しでも研修生の様子や事務所の様子を知って頂くために、つなぎのレターとして発刊されているものなんだと、レターが出来上がっていく中でスタッフの人々やボランティアの方々の働く姿を見ていて実感しました。というわけでここで少しだけ現在の事務所の様子を…職員の交代でほんの少しの間静かだった事務所も、新しい職員さんが慣れるにつれてまたまたうるさい、いえいえ楽しく、明るい事務所になって皆さん毎日山積みとなった仕事と格闘してらっしやいます。私もがんばらねばと思うこの頃です。

ゆーこ

〈編集メンバー〉

浅田大輔 阿南桂子 石坂典明 柿原登志夫
北原葉子 小林優子 西村菜穂子 古川真紀

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。